

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制

自己評価委員会、教務委員会、教養教育委員会

(責任者名)

長谷川公一

(役職名)

学長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	<p>本教育プログラムの対象である令和7年度の1年生のうち、「情報処理基礎」の受講者数は90%にあたる348名、「情報処理応用」の受講者数は40%にあたる152名だった。「情報処理基礎」と「情報処理応用」の両方を履修した学生143名のうち、92%にあたる132名がプログラムを修了しており、高い修得率を示している。</p> <p>なお、「情報処理応用」については、2年次以降に履修する学生も多くおり、本プログラムの対象外ではあるが、2年生以上の学生も100名受講していた。よって、本プログラムの対象である令和7年度以降入学の学生のうち、卒業時までに本教育プログラムを履修・修了する学生は、今後増加すると見込まれる。</p>
学修成果	<p>授業評価アンケートの結果を分析すると、「情報処理基礎」については、87%の学生が、本授業を通して自分にとって新しい知識(技能)や物事の見方が得られたと回答している。また、「情報処理応用」についてもほぼ同様に、83%の学生が、本授業を通して自分にとって新しい知識(技能)や物事の見方が得られたと回答している。加えて、前述の通り、「情報処理基礎」と「情報処理応用」の両方を履修した学生の92%が両方の単位を取得し、本教育プログラムの修了要件を満たしている。以上の結果から、両科目ともに、学生の学修成果は高いと評価できると考えられる。</p> <p>今後は、本学で実施している学生生活調査における「情報を収集し、分析する力」が身についたかどうかのアンケート項目の回答内容も考慮し、学生の学修成果をさらに多角的に評価していく予定である。</p>
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	<p>授業評価アンケートの結果を分析すると、「情報処理基礎」については、授業内容の難易度について、26%の学生がやや易しい、あるいはかなり易しいと回答し、本教育プログラム以外の教科を含む全体平均の12%に比べ、易しいと感じる学生が多かった。一方で、「情報処理応用」については、平均と比べ、難しいと感じる学生と易しいと感じる学生の割合がどちらも多く、適切と感じる学生の割合が少ないという傾向が見られた。これは、両科目ともに、学生の理解度のばらつきが大きくなっていることを示していると考えられ、今後、理解度に応じた課題や指導について検討することが重要であると感じられる。</p>
学生アンケート等を通じた後輩等其他の学生への推奨度	<p>学生アンケート等を通じた意見として、主にスキルの習得に対する実感や、将来への有用性を感じたという内容が見られた。さらに、高校の「情報」の授業だけでは補いきれない部分を補い、しっかり理解出来たという意見もあるなど、肯定的な意見も多く、他者への推奨度も一定以上あると考えられる。</p>
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	<p>「情報処理基礎」については1年生の約90%が履修しており、履修率は高い水準にあると考えられる。一方で、「情報処理応用」については1年生の約40%の履修者数にとどまっている。この要因として、R7年度に関しては、他の授業との時間割上の重複により履修できない学生が多かったことが挙げられる。今後は、各学科の教員に対して時間割編成への理解・協力を求め、時間割を改善していくとともに、学生に対して授業内容の魅力や魅力を伝え、より多くの学生が履修するように促していきたいと考えている。</p>

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
<p>教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価</p>	<p>本教育プログラムは令和7年度に開始したため、修了者の進路や活躍状況についてはまだ十分なデータが得られていない。しかし、授業評価アンケートの結果からは、学生が授業を通して、社会に出た時に役立つ知識や技能を得ていると感じていることが分かった。</p> <p>また、本学ではアセスメント・プランに基づいて、卒業後3年経過した者が勤務する企業等に対し、学修成果が身についたかどうか、今後どのような力を大学で身につけさせる必要があるかを尋ねる「卒業生就職先アンケート」を実施している。このアンケート結果を基に、学外からの視点に対応し、教育内容を改善していく予定である。</p>
<p>産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<p>本学では、自治体と連携し、本学の人的・物的資源を活用して個性豊かな地域社会の形成を支援するとともに、地域の課題の解決を図り、地域の発展を支援する地域連携事業を推進している。これらの地域連携事業の一環として、地域企業等からの意見を収集し、教育プログラムの内容や手法の改善に活かすことができると考えている。今後は、地域企業等との連携をさらに強化し、教育プログラムの内容や手法についての意見を積極的に収集し、反映させていきたいと考えている。</p>
<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>授業では、社会で活用されている数理・データサイエンス・AIの事例を紹介し、学生の興味を引き出すように工夫している。また、授業の中で、学生が自分でデータを分析したりする演習を取り入れるなど、実際に手を動かして学ぶ機会を提供することで、学ぶ楽しさを感じてもらえるようにしている。さらに、授業の中で得た数理・データサイエンス・AIに関する知識やスキルが、将来のキャリアや社会でどのように役立つかについても説明し、学ぶことの意義を理解してもらえるようにしている。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>授業評価アンケートの結果を分析し、学生の理解度や授業内容の難易度についてのフィードバックを得ている。これらのフィードバックをもとに、授業内容や方法を継続的に見直し、より分かりやすい授業を提供できるように努めている。特に、「情報処理応用」については、授業内容を容易と感じる学生と難しいと感じる学生の割合がどちらも多いという二極化の傾向が見られたため、理解度に応じた課題や指導方法の工夫を検討している。</p>